〔共同研究:大学教育における南大阪の地域文化資源の掘り起し・保存・活用の研究〕

日本仏教の揺藍の地としての南大阪 (二)

梅山秀幸

和泉地方には東南の山地から西北の茅沼の海(大阪湾)に向って流れる多くの河川がある。 流域がさらに長ければ合流して大きな川になるのだろうが、それぞれが独立した中小河川と して海に流れこむ。夏や冬の雨の少ない時期には川底がすっかりあらわになるくらい水量も 少ないが、いったん大雨になれば急激に水かさが増して段丘の上までおびやかすことになる。 槙尾川もそういった中小河川の一つに過ぎない。しかし、この川の流域にはなんと数多くの 古代寺院あるいは古代寺院址が存在していることか。川のそもそもの源にまず西国三十三ヵ 所需場の一つである槙尾山施福寺があり、その入り口にある仏教導入の際の霊地ともいうべ き池辺氏ゆかりの仏並寺も施福寺と一つのものとして把握していいものであることは、その 池辺氏の家が千五百年後の今もなお現地に存続していることへの感銘とともに先に述べた。 そこから川を下り、横山の盆地をへて国分あたりでは槙尾川の渓谷は思いのほかに深く蛇行 して、街道は高い段丘の上を通るが、その国分峠の街道筋から古い人家の密集した細い路地 を通った奥まったところに国分寺が存在する。急峻な渓谷からなだらかな傾斜地に変わり、 いくつかの農業用水の池を横目に川を下っていくと、仏教にゆかりのある地名の納花を過ぎ、 室堂を通り過ぎたところには池田廃寺(現明王院)があり、さらには坂本寺(現禅寂寺)が ある。それぞれが古代氏族の池田首、そして坂本臣の氏寺であり、かつてはその氏族の勢力 を示して威容を誇ったものと思われるが,そこからさらに下って平野部のかつての国府近く には和泉廃寺があった。それら槙尾川流域の古代寺院(址)について今回は一つにまとめて 論じて見たいと考えていたのだが、実際に資料を調べ、足を運んで山林や谷田や人家の中を 歩きまわっている過程で一つ一つの寺院(址)が背後にもつ歴史が思いのほかに深い層をな していることがわかった。槙尾川流域の寺々についてだけでも、あるいは二回、三回と書き 継ぐことになるかもしれない。

まずは国分峠の和泉国国分寺である。いまは人家の中にひっそりとたたずむささやかな寺であるが、その寺を調べていく過程で三人の女性の姿が立ち現れてくる。

キーワード:国分寺、光明皇后、県犬養橘三千代、檀林皇后、橘諸兄



写真1 和泉国国分寺

【一人目の女性 光明皇后】

『大阪府全志』は次のように述べる。

国分寺は中央字北条にあり、護国山と号し、真言宗高野山無量光院末にして十一面観世音を本尊とし、今は福徳寺と称す。縁起に依れば、中古一人の沙門あり、智海上人と号し、本州和泉郡浦田の産なり。同郡宮里の瀧山に住して仏乗を勧修しけるに、或る時一麋来りて上人の小便を嘗めて懐胎し、竟に一少女を生みしかば、上人之を見るに忍びず、隣嫗をして慈育せしむ。嫗は貧賎にして常に農事を業とし、少女の七歳となりし年の夏五月、嫗は野田に出て苗を植ゑ、少女は嫗に伴はれて嬉戯しけるに、槙尾寺に詣で、帰途に附きし勅使大臣藤原不比等、一瑞気の揚るを見れば是即ち少女の全身より光を放てるなり(北池田村大字室堂女鹿坂の西辺に、今も照田・光田といへる字地あり、里伝に依れば当時少女の遊び居りし所なりといへり)。依て大臣輿より下りて之を見るに、体貌殊麗なりければ、光明子と名づけ、嫗に請ふて輿を同うして伴なひ帰る。長ずるに従ひて艷麗益加はり、毎に君側に侍し恩寵を得て、天平元年八月立ちて后宮となれり。光明皇后即ち是れなり。性酷だ仏法を好み、幾多の寺院を創建し、此の地は其の家郷たるを以て伽藍を構へて安楽寺と号し、後承和年中勅して国分寺となすと。

ここまでが、前段である。ここにはたいへん不思議なことが書かれている。聖武天皇の后であった光明皇后はこの地の出身であるというだけではなく、実は僧侶の小便を嘗めた雌鹿が懐妊して生まれた子どもだというのである。その子は近所の老婆に育てられて美しい少女となり、たまたま槙尾寺に勅使として参詣した藤原不比等が全身から光明を放つような少女を見て、これをもらい受けて都に連れもどった。不比等がこの光り輝く美しさの少女に出会ったのは、槙尾川をさらに下った現在の室堂あたりだという説明もつけ加えている。成長する

にともなって、この少女の艶麗さはさらに増し、聖武天皇のもとに入内していつもその側に 侍り、天平八年(736)には皇后となった。その人となりは、仏教を好み、多くの寺院を建 立したが、この地はみずからの誕生の地だということで寺院を建てて名前を安楽寺とつけ、 平安時代の承和年中に国分寺としたというのである。

河内国から和泉郡と日根郡, さらに大鳥郡を割いて和泉監を置いたのが霊亀二年 (716), その後, 天平十二年 (740) には和泉監は廃止されて河内国にもどり, 天平宝字元年 (757) にふたたび河内国から分離して和泉国が置かれるようになった。国分寺設置の詔が出されたのは天平十三年 (741) のことであったから, その当時には和泉国は存在しない。和泉国が設立されてもしばらくは国分寺が置かれることはなく, 平安時代に入って始めて和泉国からの申請によって, 安楽寺を国分寺とすることとなった。

『続日本後紀』承和六年五月辛巳朔癸未には、

和泉国言す,和泉郡に在る安楽寺を以て国分寺と為し,講師一員,僧十口を置かん,但し読師は置かず,と。請ふに依って之を許す。

とあって、安楽寺が国分寺となったのは承和六年(839)五月三日のことだったのを確認することができる。

『大阪府全志』は大正十一年(1922)の発行であるが、光明皇后が実は僧侶の小便をなめた雌鹿が孕んで生まれた子どもだというのは、いかに俗伝であっても、その当時としては処理に困ったであろう。著者の井上正雄は、「然れども是れ妄誕不敬の説なり」として後段を始めている。たしかに不敬きわまりない言説である。そこで井上氏は『続日本紀』をもとに整理する。

光明皇后は後掲続日本紀に見ゆるが如く、淡海公藤原不比等の女にして、十六歳のとき立ちて聖武天皇の妃となり、天平元年八月皇后となり給ひ、孝謙天皇の母后にましませり、いかでか、る事のあるべき、附会の説も亦極まれり。然れども皇后は国分寺を創建せしめ給ひし御方なれば、此の寺の創立も皇后御在世の時ならんか。

「いかでか、る事のあるべき」として光明皇后の母が雌鹿であるという伝承は否定されなくてはならない。光明皇后が崩御したのは天平宝字四年(760)六月七日のことであるが、『続日本紀』のその日の条には詳しい崩伝がある。

六月乙丑,天平応真仁正皇太后 崩りましぬ。姓は藤原氏。近江朝の大織冠内大臣鎌足の孫,平城朝の贈正一位太政大臣不比等の女なり。母は贈正一位県犬養橘宿祢三千代と曰ふ。皇太后,幼くして聡慧にして、早く声誉を播けり。勝宝感神聖武皇帝儲弐とあ

りし日、納れて妃としたまふ。時に十六。衆御を接引して、皆、その歓びを尽し、雑しく礼訓に関ひ、敦く仏道を崇む。神亀元年、聖武皇帝位に即きたまひて、正一位を授け、大夫人としたまふ。高野天皇と皇太子とを生む。その皇太子は、誕れて三月にして、立ちて皇太子と為る。神亀五年、美くして薨じき。時に年二。天平元年、大夫人を尊びて皇后とす。湯沐の外、更に別封一千戸と、高野天皇の東宮に封一千戸を加ふ。大后、仁慈にして、志、物を救ふに在り。東大寺と天下の国分寺を創建するは、本、大后の勧めし所なり。また、悲田・施薬の両院を設けて、天下の飢ゑ病める徒を療し養す。勝宝元年、高野天皇、禅を受け、皇后宮職を改めて紫微中台と曰ふ。勲賢を妙選して、台司に並列ねたり。宝字二年、尊号を上りて天平応真皇太后と曰ふ。中台を改めて坤宮官と曰ふ。崩する時、春秋六十。

ここまでが「崩伝」であり、以下、三品船親王以下十二人の装束使を決め、三品池田親王 以下十二人の山作司を決め、さらに養民司を決め、前後次第司を決めて、盛大な葬儀を行う こととしたことが記されている。そして、「天の下の諸国に挙哀すること三日、服期三日」 とあって、同じ月の二十八日に、「仁正皇太后を大和国添上郡佐保山に葬る」とある。奈良 女子大学の北の方に佐保川を遡って行けば、静かな住宅地の奥に今もたしかに聖武天皇陵と 並んで光明皇后陵はある。

「崩伝」には、祖父は藤原鎌足、父は藤原不比等であり、そして、聖武天皇の皇后であっ たとあるが、ここまでは学校の教科書にも書かれていて、誰もが知っていることである。そ して母親は贈正一位県犬養橘宿禰三千代、歴々たる女性であって、国分峠の雌鹿であったな どということはもちろん正史には書かれていない。幼いときから聡明であり、それは世間で も評判であった。ここでは特にその光りかがやくような美しさについては触れていない。彼 女は伝説的な美人であった。奈良の法華寺の十一面観音像は光明皇后を模したものと伝えら れる。ガンダーラの生見王は生身の観音菩薩を見たいと望んでいたが、ある夜の夢に、生き た観音菩薩が見たければ、日本の光明皇后を見ればいいと告げられる。そこで、仏師を遣わ して光明皇后をモデルに三体の観音菩薩像を作らせた、その一体が今の法華寺の十一面観音 菩薩像なのだという。その藤原光明子は聖武天皇が皇太子になったとき、十六歳でその妃と なった。ちなみに聖武天皇と光明子は同じ年に生まれ、光明子の異母姉であり聖武の母であ る藤原宮子は精神に病を抱えていて極度の引き籠もり状態であったから、県犬養橘宿祢三千 代こそが乳母、あるいはそれに類した存在として聖武の母代わりであったと思われる。つま り、三千代の右の乳房を光明子が吸い、左の乳房を聖武が吸って育って、その二人がそのま ま夫婦になったということになろう。親密といえば親密、遠慮がないといえば遠慮がない関 係である。

光明子は活発で社交的であり、多くの人びとに会って愛想よく振る舞い、皆が歓びを尽く すように心がけ、しかも、礼儀にかなった行いをして、そして篤く仏道を敬った。神亀元年 (724) 聖武天皇が即位すると、大夫人となり、阿倍皇女(後の孝謙天皇)と基王を生んだが、基王の方は生まれて三カ月のこれまでの歴史になかった早さで皇太子となったものの、神亀元年(728)二歳で薨去した。そして天平元年(729)に光明子は皇后となったが、「皇后」という称号を臣下として名乗ったのは光明皇后が始めてということになる。姉の藤原宮子は文武天皇に嫁いだものの、「皇后」を名乗ることができず、あくまでも「夫人」だったのである。光明子の人となりは仁慈の心に富んでいて、困窮した人びとを救済しようとつねに心がけた。『続日本紀』の記事で、ここで特筆すべきなのは、この時代に東大寺および天下に国分寺を創建したのは、もともと彼女が勧めたものであったということ、また悲田院と施薬院を設置して天下の飢えかつ病んだ人びとを療養させるようにしたという彼女の仏法への傾斜と菩薩のような深い慈悲の心である。勝宝元年(749)、娘の孝謙天皇が即位すると、皇后宮職を紫微中台にあらため、さらに坤宮官と名を変えて、そこには能吏たちが詰めた。六十歳で崩御したのは天平宝字四年(760)のことであったから、光明皇太后の紫微中台そして坤宮官に能吏がつめたとすれば、十年以上にわたって政治権力をふるったということになろう。

はなはだしく不敬ではあっても、光明皇后が雌鹿の子どもという伝説ははるか遠くの三河の鳳来寺にも伝わっている。そちらでは山の上から小便をしたのは利修仙人である。利修仙人はその子を三歳まで育て上げ、竹籠に入れて奈良の都に上って都大路に捨てた。それを藤原不比等が拾って育てたのだというのである。ちなみに鳳来寺といえば、徳川家康はこの寺の本尊の薬師如来に祈って授かった子なのだという。そしてもう一人、鳳来寺の薬師如来の申し子として忘れてならないのは、虚構の人物であるにしても、矢作の宿の遊女であった浄瑠璃姫であろう。この浄瑠璃姫を主人公とした物語が十六世紀に一世を風靡し、それと同じ形式の語り物と操り人形とが合体して人形浄瑠璃の起源となる。

光明子には母の異なる姉にあたり、文武天皇に入内した宮子もまた、実は藤原不比等の子などではなく、紀州日高郡の海人の娘だという伝承が道成寺の縁起として伝わっている。恋に狂った女性が若い僧侶を追いかけ、ついには蛇となって鐘の中に隠れた僧侶を鐘もろともに焼きつくすという例の説話とは別系統の、文武天皇勅願寺としての道成寺のそもそもの創建を語る、髪長姫の物語である。梅原猛先生は、文武天皇の夫人となった宮子は藤原不比等の女などではなく、実は海人の子であるという伝承を史実と考えた上で、画期的な奈良時代論である『海人と天皇』を書かれた』。鳥がくわえてきた美しく長い髪の毛の持ち主の女性を探し求めて日高郡の海女・宮子を見つけ出して都に連れて来て文武天皇と結婚させる。これは美しい金髪の持ち主を求めてアイルランドの姫君のイズーをコーンウォルに連れて来てマルク王と結婚させる「トリスタンとイズー」伝承の日本版といえるかもしれない。不比等の二人の女とされる、宮子が文武天皇に嫁ぎ、光明子が聖武天皇に嫁いだことが、平安時代

^{1)『}梅原猛著作集(第二期)3,4巻 海人と天皇 上・下』(小学館 2002年)

の藤原氏の外戚政策の雛型となるわけだが、その最初の二人ともに実の娘ではなく、しかも 卑賎の出自だとする伝承はにわかに史実とは考えにくいかもしれないが(いかでか、る事の あるべき!)、宮子についてはきわめて緻密かつ蓋然的な証明を梅原先生はなされている。 それなら、光明皇后の場合はどうであろうか。

現在の国分寺は密集した集落の中のごく狭い寺域に本堂と庫裏だけをもった小寺に過ぎない。しかし、本来は今の国分の集落全域を飲みこむほどの境域をもち、七堂伽藍を備えた立派なものであったと思われる。そして、光明皇后の誕生地というのは、正確には、国分寺の奥の院として少し離れた浄福寺なのだという。ふたたび『大阪府全志』に当たってみよう。

浄福寺は字滝山にあり、堺市宝泉寺末にして阿弥陀如来・薬師如来を本尊とす。和銅六年智海上人の開基なり。もと法相宗なりしが、宝永年中浄土宗に改む。口稗に依れば、光明皇后の誕生地なるを以て、天平勝宝年中同皇后は此の地に行幸して薬師の像を安置し、白滝の霊水を汲みて薬湯を設け、以て諸人の病苦を救はせ給ふ、故に白滝山成福寺と号せしが、後今の寺名に改めしと。

この浄福寺は国分寺(安楽寺)よりは国分峠近く、国分寺とは街道の反対側の槙尾川近く にある。古い民家の中を通り抜けて行くと、やはり本堂と庫裏だけの小さな寺である。本堂 の裏には墓地があり、新しい立派な墓石がならんでいるが、奥の方には廃れて倒れかけ、苔 の生した墓石もある。過疎化が進んでいてもう供養されることのない墓々が増えたのであろ う。その墓地を抜けて、林の中のもう人が歩くこともなく朽木が倒れて失われかけた路を足 を取られながら、迷わないかとためらいながら行くと、「光明弁財天」という小さな祠があっ た。さらに行くと、光明子が都に連れられて行くとき、地団太を踏んで別れを悲しがったと いう母鹿の足跡石というのがある。そのすぐ目の前には槙尾川を堰くダムがあり、実はここ が十キロほども離れた光明池の取水源となっていることを、私は始めて知った。十年以上、 通勤のために泉北高速鉄道を利用していて、光明池駅を通り過ぎてきたものの、ぼんやりと していて、その命名の意味を深く考えたことはなかった。しかも、駅から見える線路の横の 小さな池を光明池というのだと信じこんでいた。そうではなく、線路からは見えない東南の 大きな池を光明池といい、その池は実際に光明子が誕生したという伝承の地、お坊さんが小 便をして母鹿がそれを嘗めたという場所にある滝沢から水を取っていたのだった。光明子が 生まれたのは701年のことであるが、この浄福寺の開基は和銅六年(713)と伝え、天平勝宝 年間(749~757)にはいちど光明皇后が行幸して、光明滝の霊水で薬湯を煎じて病者に与え て救済したのだという。

光明子をあえて雌鹿の子だとする伝承の意味合いについて適当な説明を探せないが、これはかならずしも光明皇后をおとしめる説話ではなく、彼女の際立った聖性を尋常ではない出自によって示す説話であると考えるべきなのであろう。光明子が困窮した人びとを救済した





写真2 净福寺

写真3 光明皇后の母鹿の足跡石

という、その聖人としての伝承には根強いものがある。そして、光明皇后がこの和泉の地で生まれたという伝承自体もけっして「妄誕」として片付けることができない性質のもののように思われる。三河の鳳来寺は距離的に都とはあまりに遠く離れているが、和泉地方はさほど遠くはない。本当にこの地で生まれたのではなかったか。

【二人目の女性 県犬養橘宿祢三千代】

和泉地方と光明皇后を結びつけるためには、そのあいだに一人の女性を媒介させればいいことに、今回、何冊かの書物をひもとき、いくつかの場所を歩きまわっていて気がついた。 光明皇后の母親は県犬養橘宿禰三千代であった。梅原先生が海人の子だとされる姉の宮子の母親は賀茂比売としてその名は伝わるものの、歴史の中にははっきりした輪郭を現わすことのない女性である。この賀茂比売が海女であってもおかしくはない。一方、県犬養橘宿禰三千代の存在ははっきりしていて、あるいは奈良時代史の最重要人物であるといっても過言ではないかもしれない。もう四十年ほども前のことになるが、梅原先生と亡くなられた上山春平先生は、父親の藤原鎌足にくらべて蔭に隠れた感のある藤原不比等を歴史の表舞台に登場させ、読書界に一大センセーションを巻き起こされた。これまでの天皇一代きりの都ではなく恒常的な都である平城京を造り、法律を整備して大宝律令を完成し、和同開珎という最初の貨幣を作って経済活動の基礎を整備し、さらには『古事記』・『日本書紀』の製作主体ともなって、天皇を中心とした記紀の国家イデオロギーをも完成させた。それらすべてに藤原不比等は主導的な立場でかかわり、いわば不比等のプランニングにそって律令国家としての日本は成立したというのであった。こ

²⁾ 上山春平『埋もれた巨像』(岩波書店 1977) 『梅原猛著作集 (第一期) 1巻 神々の流竄』(集英社 1981 ただし初出は季刊誌『すばる』創刊 号 1971)

最近の義江明子著『県犬養橘宿禰三千代』では、つねに男性の視点で捕えられがちな歴史の動きを女性の視点から捕えなおしていて、歴史学にも新しい風が吹いているのだとあらためて目を覚まされる思いがした。義江氏は、県犬養橘宿禰三千代は天才政治家でもあった藤原不比等を「支えた」のではなく、不比等とともに二人三脚で新しい政治の局面をつくりだした人物としてとらえ直している³。「妹の力」をいい(妹はイモウトではなく、長上の姉も含む)、日本の家の中での「家刀自」の智慧と裁量を重視するのは柳田国男の考え方でもあるが、県犬養橘宿禰三千代は、義江氏のいうように奈良時代の国家の家刀自であったといえるかもしれない。不比等が傑物であったとすれば、その配偶者であった三千代もまたそれに劣らず傑物だったのであろう。三千代が亡くなったのは天平五年(733)正月であるが、『続日本紀』には次のようにある。

庚戌(十一日),内命婦正三位県犬養橘宿祢三千代薨じぬ。従四位下高安王らを遣して、喪事を監護らしむ。葬の儀を賜ふこと散一位に准ふ。命婦は皇后の母なり。

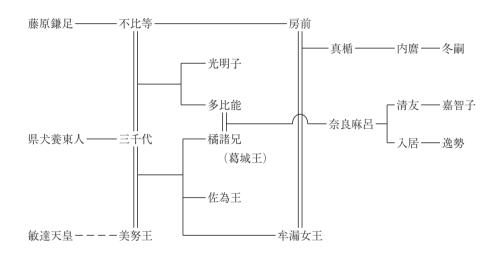
このときに正三位であったが、葬儀は散一位の位格で行われ、この年の十二月には従一位が贈られている。さらにその後、正一位を贈られ、「県大養橘氏大夫人」の称号を与えられている。この薨去した日には特別な薨伝はないのだが、天平八年(736)十一月、三千代の美努王とのあいだの子である葛城王と佐為王とが王の身分を棄てて、母一代きりが名乗ることを許された橘姓を賜りたいと願い出た文章に次のようにある。

葛城が親母、贈従一位県犬養橘宿祢、上、浄御原朝廷を歴て、下、藤原大宮に逮ぶまで、君に事へて命を致し、孝を移して忠を為せり。夙夜労を忘れ、累代力を竭せり。和銅元年十一月二十一日、国を挙げて大嘗に供奉る。二十五日、御宴あり。天皇、忠誠の至を誉めて杯に浮べる橘を賜ひき。 勅して曰ひしく、「橘は菓子の長上にして、人の好む所なり。柯は、霜雪を凌ぎて繁茂り、葉は寒暑を経て彫まず。珠玉と共に光に競り、金・銀に交りて強美し。是を以て、汝の姓は橘宿祢を賜ふ」とのたまひき。

和銅元年(708)年の十一月,三千代は当時の天皇の元明から橘の姓を賜ったことになるが,それはこれまでの天武・持統・文武の三代によく仕えたことへの褒賞を意味していた。この詔の後の元明・元正・聖武にも仕えたわけだから,六代の天皇に仕えたことになる。伝説上の人物である武内宿祢は五代の天皇に仕えたというが,三千代の場合は六代の天皇に仕え,内侍司が正式にできるのは大宝律令以後だとしても,内侍的な役割で天皇のそば近く仕える宮人であったと考えられるから,つねに政権の中枢にいて,二度目の夫である藤原不比

³⁾ 義江明子『県犬養橘三千代』(吉川弘文館 2009)

等とともに律令国家の骨格を作った女性として評価しなくてはならない。しかも,彼女は自身の胎内から,当時の,また後代の政権の中枢にあった時代を動かす人材そのものを生みだしたことによっても歴史に貢献していることになる。最初の夫の敏達天皇の末裔の美努王とのあいだには葛城王(後の橘諸兄)・佐為王・牟漏女王を産み,二度目の夫の藤原不比等とのあいだには安宿媛(光明皇后)と多比能を産んだ。牟漏女王は不比等の息子の房前と結婚して永手を生み,藤原北家の基礎を作ってもいる。さらに父は違うが三千代を母とする葛城王(橘諸兄)と多比能の兄妹は結婚して奈良麻呂を生んでいる。同父異母のきょうだいの結婚は珍しくないが,異父同母のきょうだいの結婚は珍しい。しかし,この奈良麻呂は謀叛を起こして悲惨な最期を遂げたが,その孫には橘嘉智子がいて,また橘逸勢いがいることになる。この逸勢もまた謀叛を起こして悲惨な最期を遂げた。



さて、県犬養氏の本拠地について、先の義江氏の『県犬養橘宿祢三千代』では河内国の古市あたりを考えられている。光明子の名前を安宿(あすかべ)媛ともいったが、そこには明日香部神社もたしかにある。岸俊夫氏の「県犬養橘宿祢三千代をめぐる臆説」という論文を踏まえてのものである。ただし、岸氏の論文は「臆説」とあって、和泉地方と県犬養の深い関わりをまったく否定されているわけではない。県犬養氏の本拠地を和泉地方に置かれるのは、黛弘道氏の「犬養氏および犬養部の研究」という論文である。幸いにもコンピューターで県犬養氏の検索をしていてこの論文に突き当たり、図書館に行くまでもなく、pdfですべてを読むことができた。黛氏は犬養部の職掌について、先行の説として、(一) 犬を飼養して狩猟に従事した、(二) 犬を飼養して屯倉を守衛した、(三) 狩猟・守衛のいずれも行ったとする三つの説を挙げた上で、イヌカイとミヤケという地名が古代屯倉の範囲内と考えられる程度の至近距離に並んで現存する例をいくつか挙げて検討を加える。結論として犬養部の

⁴⁾ 岸俊夫氏『宮都と木簡』(吉川弘文館 1977)

⁵⁾ 黛弘道『律令国家成立史の研究』(吉川弘文館 1982) に所収されている。

職掌は(二)の屯倉の守衛説になるのだが、犬が狩猟犬としてよりも番犬として用いられたことを述べ、神社にはなぜ狛犬が置かれるのかまで、木堂・犬養毅の随筆を引用して述べていてはなはだおもしろい。この論文の中でイヌカイとミヤケとの関係を無視しがたい例として九つを列挙した後で、黛氏は第十例、十一例として和泉の例を挙げている。

前に続けて第十例とすれば、それは和泉志日根郡の条に見える犬飼畑なる地名と茅渟県(または茅渟宮)との関係である。茅渟県は凡そ和泉国と一致すると見られ(宮は日根郡とされる)、かつこの県は屯倉に準じて皇室の直轄領と考えられるから、その領域内には犬飼畑なる地名の存したことは偶然ではあるまい。そればかりではない。和泉志泉南郡条にはまた河内川県犬養神祠のあったことが記されているので、茅渟県における犬養部は県犬養氏の管掌するところであったと考えられ、県犬養氏の県の意味も自ずから明らかになるのである。姓氏録によれば県犬養宿禰は左京に貫せられているが、本貫はここ和泉国であり、遡れば河内国の茅渟県であったと云える。

第十一例もその近辺である。和泉志泉南郡の条に「箕土路旧名犬飼」とあるが、泉南郡は和泉郡の南を割いて新設された郡で、したがってここもまた元来は茅渟県の域内ということができる。和泉志によれば同郡内に三田の地名もあり、これもイヌカイとアガタとの関係を思わせる。また、この犬飼の地には橘諸兄の子孫と称する三宅氏が現に居住しているとのことで、これもまた橘氏→県犬養→ミヤケ・アガタと連想して行くと、元来イヌカイとアガタとに密接な関係があったことから生じた伝承ではなかろうか。

黛氏がここに挙げる第十例および第十一例は、光明皇后の和泉との関連を説明するのに補強材料となるであろう。「あがた」の語源は明快そのもので、「我が田」であり、王家の田なのであろうが、屯倉がさらに発展して範囲を広げ、屯倉を中心にして設定された行政地域を「県(あがた)」と呼んだものと考えられる。県大養という姓の県は、ここでは茅渟県の県そのものであると黛氏はいうのである。和泉市の隣の岸和田市の箕土路は行基が造った久米田池の近くにあるが、その旧地名は犬飼であったと、『泉州志』はいう。箕土路にはまた「河内川県犬養神祠」があって、それを「犬養堂」と人びとは称しているという。三田は御田の意味であり、要するに貴人の田であり、屯倉に通じることばであるが、この三田も箕土路とは久米田池をはさんだところにある。安宿媛についていうなら、和泉市域の坂本郷にかつては明日香部という地名もあったようである。。実は久米田池および久米田寺についても、もちろん行基が主体になって勧進をして作ったとしても、橋諸兄の影が色濃くまとわりついている。僧侶が国家に管理され、民衆への自由な布教が禁じられていた時代に、行基はあくまで庶民の中にあって、禁を破ってまでその福祉をも兼ねた布教活動を行っていたのが、国家

^{6) 『}日本歴史地名大系28 大阪府の地名Ⅱ』(平凡社)の「黒鳥村」の項に「坂本郷明日香里内の地」の売買之事が見える。

に取りこまれて「転向」するのは天平十二年 (740) のことだと考えられる。房前・麻呂・武智麻呂・宇合の藤原四兄弟が立て続けに天然痘で死ぬのが天平九年 (737) であり、その後の朝廷での実権は天然痘などはねのける頑健な身体をもった橘諸兄に転がり込んでくることになる。なにしろ疫病が猖獗を極める中でまともに朝廷に出仕できる公卿は彼しかいなかったのである。

「東大寺過去帳」なるものがある。東大寺二月堂のお水取りの期間の三月五日の実忠忌とクライマックスの十二日に読みあげられる。東大寺の創建と維持に尽力した人びとを記したものである。千数百年にもわたる厖大なもので,大工や鋳物師や樵や金掘り人夫たちについても記され,謎めいた「青衣の女人」が出てくることで有名なものである。それは次のように始まる⁷。

大伽藍本願聖武皇帝 聖母皇太后宮

光明皇后 行基菩薩

本願孝謙天皇 不比等右大臣 諸兄左大臣 根本良弁僧正

当院本願実忠和尚 大仏開眼導師天竺菩提僧正……

諸兄と行基は同じ時期に歴史の表舞台に登場する。「過去帳」に藤原四兄弟の名前はない のだとあらためて考えさせられるが、東大寺の創建にかかわって行基は四番目、諸兄は七番 目に名前が呼ばれることになる。聖母皇太后宮(宮子)と不比等が大仏開眼時にはすでに故 人となっているとすれば、天皇・皇后の次にはこの二人の名前が続けて呼ばれることになる。 この二人が時代とどう切り結びお互いにどうかかわったかについては、行基にゆかりの寺々 をたどるときに改めて考えたいのだが、実をいうと、久米田寺の背後、あるいは境内の中と いってもいいところに橘諸兄の墓がある。久米田池を築いたのは行基であり、その畔に降池 院、つまり久米田寺を造ったのも行基であることはあらためていうまでもない。ところが、 久米田寺の本堂や開山堂(行基堂)を抜けて細い道を抜けて裏に抜けると、右手に垣根に囲 まれ、盛り土をされた円墳があって、それは光明皇后の陵なのだという。その伝光明皇后陵 と道を挟んで青々と水をたたえた濠があり、かなり大きな前方後円墳がある。宮内庁に管理 されていれば立ち入り禁止で鬱蒼と木々が生い茂っているのだろうが、近所の人びとの散策 の場、子どもたちのかっこうの遊び場となっているためか、禿げ山となっていて、実際に近 づくと盛り土のボリュームをじかに確認することができる。その深い濠と高い盛り土を利用 して室町時代には城塞として利用されたというが、お寺でいただいたパンフレットには航空 写真が載っていて、それを見ると、久米田寺に参詣する人は本堂にお参りしながら、実はこ

^{7) 『}東大寺お水取りの記録と研究』(小学館 1986) によるが、インターネットで原本の冒頭の写真を見ることができる。

の古墳にお参りしている格好になる。それを橘諸兄の墓だと云い伝えていることになる。奈 良時代はもう前方後円墳の時代ではなく、これが諸兄の墓であるはずはないのだが、これを あえて諸兄の墓だとするのには深い意味があるように思われる。『大阪府全志』を引くと次 のようにある。

橘諸兄塚は久米田寺背後の松林中にあり、東西九十間・南北三十五間・面積三千一百五十坪を有し、周囲には濠池断続して存す。中に円石の一碑あり、碑面に橘諸兄公塚の五字を刻せりと伝ふれども、磨滅して殆ど読むべからず。諸兄は難波皇子の曾孫美努王の子にして、初め葛城王といひ、後諸兄と改む。天平八年橘宿祢の姓を授けられ、同十五年従一位左大臣となり、大宰帥を兼ね、勝宝の初め正一位に進み、改めて朝臣の姓を授けられしが、同八年致仕して、宝字元年正月七十四歳を以て薨去す。其の此に葬られし縁由は詳ならざれども、久米田池を穿ち、久米田寺開創の大檀越たりし関係もあれば、其の功績を伝へんが為めに廟を建て、祭りしものならんか。



写真4 久米田寺裏の伝橘諸兄の墓



写真5 久米田寺裏の伝光明皇后陵

橘諸兄を「久米田池を穿ち、久米田寺開創の大檀越」というのも伝承になるが、この前方 後円墳の濠に沿って左に歩いて行くと、今度はやや小さな円墳がある。先の光明皇后の陵よ りも大きいが、こちらは諸兄の夫人の墓だと伝えられている。

橘諸兄の墓については、京都府井手町にもあり、わたしはもうずいぶん前に、遠足のつもりでその界隈を歩きまわって、竹林の中のその墓に参ったことがある。諸兄は井手の左大臣ともいわれ、井手に別荘をもっていて、井手寺址も発掘されている。そこに墓があるのに何の不思議もないのだが、久米田池畔の前方後円墳がその墓だと言い伝え、この界隈に色濃く伝承を残すのはどうしてなのだろうか。久米田池からは上流になるが、岸和田市には葛城という地名が今も残っていて、そちらにも橘諸兄(葛城王)の伝承が残っている。津田川の上流の堰を諸兄堰というらしいのである。実際に歩きまわって見たものの、それをまだわたしは確認できていない。『大阪府全志』には次のようにいう。

諸兄堰といへるは津田川の上流にあり。捨石の如き石数個にて堰止め、両方に分水せるものにして、数百年を過ぐるも曾て緩みしことなく、伝へて橘諸兄の為せし所なりといふ。

犬養(箕土路),三田,葛城と,久米田池をぐるりと囲むように県犬養(橘)氏にかかわる地名が残り,その中心に位置する久米田池畔には橘諸兄とその妻,さらには諸兄とは母を同じくする妹の光明皇后の墓もあるということになる。墓については後世の仮託に過ぎないとしても,どうやら県犬養(橘)氏とこの地方には深い関わりがあったようである。現在でも実家に帰って出産することは普通に行われている。光明皇后は実際に和泉で生まれたのかもしれない。母系制や母権制,あるいは母方居住の社会制度をあえてここで取り上げずとも,光明皇后伝説が母方の県犬養氏の本拠地に色濃く残るのはそれほど不思議なことではない。

光明皇后の母方の県犬養(橘)氏の本貫が和泉にあったと考えると、もう一つ和泉に伝わる奇妙な伝承の説明が可能となる。和泉も最南端、紀州街道の大阪府と和歌山県の境になるのは孝子峠であるが、この下孝子の集落には橘逸勢とその女の妙冲の墓がある。ここでも『大阪府全志』を引くと、次のように書かれている。

橘逸勢及び妙冲の墓は下孝子畑の字あやめにあり。封土の高さ各二尺許にして、逸勢の墓域は十五坪・妙冲の墓域は二十二坪なり。文徳実録に依れば、妙冲は其の父逸勢の屍を負ひて京に帰りしと見ゆるも、里伝に依れば、妙冲は京に帰らずして直に此の地に来り、その屍を此に葬り、其の身も此の地に住し墓を守りて終わり、其の邸址は墓を距る二町程東方なるあやめ屋敷是れにして、あやめは妙冲冲の俗称なりしと。邸址は今は松林となる。

承和九年 (742), 嵯峨天皇が崩御すると, 伴健岑と橘逸勢は謀叛を問われ, 恒貞親王は皇太子を廃される。いわゆる承和の変である。藤原良房が妹の順子が仁明天皇とのあいだにもうけた道康親王 (後の文徳天皇) を皇太子にするために謀って起こした陰謀であると考えられるが, 空海・嵯峨天皇とともに三筆と称された橘逸勢もこのときに伊豆に流され, 配流先におもむく途中の遠江で死んだ。その八年後には赦されて正五位を贈られているのだが, そのときに橘逸勢の伝記が記されている。『文徳実録』嘉祥三年 (850) 五月十五日の条である。

壬辰,流人橘朝臣逸勢に正五位下を追贈す。勅を遠江国に下し,本郷に帰葬せしむ。 逸勢は右中弁従四位下入居の子なり。性たるや放誕,細節に拘らず。尤も隷書に妙なり。 宮門の榜題,手迹見在す。延暦の季,聘唐使に随ひて入唐す。唐中の文人,呼びて橘秀 才と為す。帰来の日,数官に歴事し,年老いて羸え病たるを以て静居して仕へず。承和 九年,健伴岑の謀叛の事に連染して拷掠さるるも服さず,死を減じて伊豆国に配流す。 初め逸勢の配所に赴くや、一女あり、悲泣して歩きて従ふ。官兵の監送する者、之を叱りて去らしむ。女は昼は止まり、夜に行き、遂に相従ふを得る。逸勢は遠江国板築駅に到り、逆旅に終はる。女、攀号して哀を盡す。便ち駅下に葬むる。葬前に廬して屍を守りて去らず。乃ち落髪して尼となり、自ら妙冲と名づく。父の為に誓念し、暁夜に苦至す。行旅し過ぐる者、之が為に流涕す。帰葬を詔せらるるに及んで、女尼は屍を負ひて京に還る。時人之を異とし、称して孝女となす。

橘逸勢は最澄や空海とともに遣唐使の一行として中国に渡った。長安の都大路を闊歩して自由を謳歌し、中国の儒生たちとも積極的に交わったようである。帰国後、いくつかの官職を経たが、それほど出世することはなく、年老いて病をかこって隠退していたはずだったのが、謀叛に連座して拷問を受け、屈服することがなく、死を減じて伊豆に流刑になった。流刑地におもむく途中の遠江の板築で死に、父を泣きながら追いかけてきた娘はそこに墓を作り、その前に廬を編んで尼となって父の墓を守った。逸勢の罪が赦されるにおよんで、娘は父の遺骸を背負って京都に還って来た、ということまでは正史の『文徳実録』にも書かれていることである。和泉地方の伝承では話はそこで終わらず、妙冲は都にとどまることなく、そのまま父親の遺骸とともに和泉地方に移り住んだのだということになる。本当にそうであったかどうかはともかく、やはり県犬養(橘)氏の縁故をたどって、和泉地方にこのような伝承が伝えられたと考えるのが妥当だと思われる。

祟りをなす霊は境界に置かれて、逆に邪鬼を祓う役目を負わされる。

菅原道真や平将門ほどの威力はなかったとしても、橘逸勢もやはり怨霊であった。京都の御所をはさんで南北に存在する上御霊・下御霊の両社は平安京に祟る、政治的には敗残の憂き目を見た人びとの怨霊を祭るが、橘逸勢もその中の一人に含まれる。承和の変があって、すぐに八年後には赦され、名誉回復がなされているというのは、その怨霊を考慮してのものなのか、「性たるや放誕、細節に拘らず」といった性格が災いして事件に巻き込まれたものの、あるいはもともとそれほどの罪はなかったものなのか、判断がつきかねるところがある。実はこの「帰葬」の詔が出る十日ほど前に、橘逸勢には従妹に当たる女性が死んでいる。この女性が死んだことによって逸勢は赦されたのだと思われるが、逸勢の赦免はその女性の死を逸勢の怨霊の祟りによるものと考えた人びとが行ったのか、心やさしいその女性が死ぬ前にせめて従兄の遺骸の帰還だけでも赦されるようにと嘆願して行われたものだったのか、どちらだったのであろうか。

一日、わたしはこの橘逸勢と妙冲父娘の墓を訪ねていった。上孝子、下孝子を訪ねて探しまわったが、墓のありかがわからない。外に出ている人は少なく、上孝子にある交番にも巡査はいなかった。なにしろ「三筆」の一人なのだから、書道家たちの尊崇を集めて参拝者もあり、それなりには大切に管理されているのではないかと考えていたのだが、そうではなかった。探しあぐねて、なかば諦めて帰りかけていたところ、集落からはかなり離れて、街道筋



写真6 孝子峠の橘逸勢の墓



写真7 妙冲の墓

のモーテルの裏側に、線路をはさむ形で、橘逸勢と妙冲の父娘の墓が冬枯れしたススキに隠れるようにしてあった。かつて境界には怨霊が祀られるとともに、遊女たちが集まって悪所が形成された。祝祭のような「性」もまた邪なるものを祓う旺盛な生の営みだったのだ。夜闇の街道をドライブする男女をそこだけは明るく華やかにネオンが照らし出して誘蛾燈のように誘いこむモーテルと、その裏にひっそりと枯れススキにおおわれて眠る逸勢父娘の墓の対比に、古代・中世の民俗が現代にも発想の底流として生きているのが感じられて、妙に感動的ではあった。

【三人目の女性 檀林皇后橘嘉智子】

和泉国国分寺をめぐって、ここにもう一人、またもやゆかしくも腐長けた女性の姿が浮かび上がってくる。承和の変で謀叛人となった橘逸勢には従妹にあたることになるが、県犬養橘宿祢三千代の玄孫であり、嵯峨天皇の皇后となり、仁明天皇の母となった橘嘉智子である。「風容絶異、手は膝に過ぎ、髪は地に萎がふ、見る者皆驚く」(『文徳実録』)とあるように、驚嘆すべき絶世の美人であった。この血筋には、三千代自身がやはり美しかったのであろうが、光り耀くような光明子を初めとして、尋常ならざる美しさの女性が出現する。奈良の法華寺の十一面観音像は光明皇后の面影を写すものだといわれるが、嘉智子を模したものだという説があった。この説はうべなえないが、近接した時代の美人の基準など似通ったものだし、ましてやもともと血がつながっていて同じ遺伝子をもっているとすれば、二人ともに同じような容姿であったのかもしれない。しかし、ここでは美人について喋々と述べたいわけではない。「クレオパトラの鼻が低ければ、歴史は変わっていたであろう」とパスカルがいったように、一人の女性の美醜が歴史とは無関係というわけではなく、むしろ歴史を動かす大

きなカギを握るものであったとしても。

先に述べたように、『続日本後記』によれば、安楽寺を和泉国国分寺とすることを申請して、講師や僧侶を置くことが許可されたのは承和六年(839)の五月三日のことである。このときの天皇は仁明天皇で、その母后は檀林皇后、すなわち橘嘉智子であった。嵯峨もまだ上皇として存命であり(薨去は承和九年)、空海はすでにいない(承和二年に遷化)。この時代の仏教政策には橘嘉智子の意志が大きく反映していると考えてもいい。聖武天皇の国分寺・国分尼寺の創建が、嘉智子がその美貌とともに性格をも受け継いでいるらしい光明皇后の意志によるものであったと同じように、嘉智子もまた寺々の存廃に大きくかかわっているらしく思われる。同年の六月の二十八日には次のような勅令が出ている。

丁丑, 勅す, 国分二寺, 建立の遠くより, 一は則ち名づけて金光明護国寺とし, 一は 則ち号して法華滅罪寺とす。先帝の救世利物の法, 遠く不朽なるを伝ふる者なり。而る に頃年, 僧寺安居の会にて独り最勝王経を講じ, 尼寺滅罪の場にて法華妙典を説くこと なし。設くる所の法蔵, 用ゆるに同じからざる有り。是, 忍びて行われず, 恐らくは修 善欠如せんか。宜しく五畿内七道の諸国, 安居の会には, 先づ僧寺において最勝王経を 講じ, 次に尼寺において法華経を講ぜしめ, 願ふところの無二無三の勝理を国家に開示 し, 除災植福の大善を広く衆庶に被らせん, と。

聖武天皇と光明皇后が国分寺と国分尼寺を創建した当初から、国分寺は金光明護国寺とし、国分尼寺は法華滅罪寺とした。これは聖武天皇らの世の中を救い、人びとに利益する精神を久しく不朽たらしめようとするものである。しかるに最近では、国分寺での安居会で最勝王経の講読はおこなわれるものの、国分尼寺での法華経講読は行われていない。せっかく設置された寺院であるのに、同じように活用されていない。逼塞して行われないままでは、善行を修めるのに欠けることになろう。そこで、五畿内と七道の諸国の国分寺と国分尼寺とにおいて、国分寺の安居会では最勝王経を講じ、国分尼寺では法華経を講じるように徹底して、本来の願のとおり、この世にまたとない優れた道理を広く国家に示し、災いを取り除き、福徳が植えつけられて、大いなる功徳が人びとにもたらされるようにしよう……。

天平からは百年が経って、国分寺と国分寺とは光明皇后の意図した通りには運営されなくなっている。国分寺では最勝王経が、国分尼寺では法華経がきちんと講じられなくてはならないのに、国分寺の最勝王経の講読はいちおうは行われているが、特に国分尼寺の方の法華経の講読が行われてはいない。『法華経』提婆達多品は女人成仏を説くことで有名である。しかし、そこでは女人が女人の姿のまま成仏できるという話ではない。いわゆる変成男子の話であり、八歳の龍女に男性器が生じ、その後に成仏するという話であって、現在のフェミニズムからはやはり女性蔑視というしかないものだが、仏教経典の中では珍しく女性の救済の可能性を説くものとして『法華経』が尊重されてきたのは確かであり、光明皇后はそこに

魅かれて、自己の居住所を法華減罪之寺とし、全国にも国分尼寺を創建させたものであったろう。おそらく檀林皇后が国分尼寺の立て直しを図ったのも同じ精神によるものといっていいのではないか。法華八講は空海の師匠であった石淵の勤操が始めたとされるが、盛んに行われるのは平安中期以降で、村上天皇が母親の藤原穏子の菩提を弔うために天暦九年(955)に行ったのが貴顕のあいだで行われた最初であるという。『源氏物語』賢木の巻で、藤壺は法華八講を四日間にわたって行い、その最後の日に人びとの哀しみの中で出家する。物語の中の非常に印象的な場面であり、藤壺の心にはさまざまな想いが去来したろうが、これまでの罪障を懺悔するとともに、不義の相手の源氏への想いを断ち切る契機としたのであろう。法華八講の主役が女性であるとは限らないし、女人成仏だけが強調されるわけでもないが、現世においても来世においてもすがるものがない女性たちは自分たちを見捨てずに救済を説く『法華経』に傾斜しやすかったは当然である。承和六年の国分寺・国分尼寺の立て直しの勅令には檀林皇后の意向が働いていると思われる。特に国分尼寺において法華経の講読を徹底するようにというのは檀林皇后の強い働きかけだと見て間違いないのではないか。

しかし、国分寺の立て直しがそう簡単にはかどったわけでもない。同じ年の九月二十一日 には次のような勅令が出ている。

己亥、勅す、聞くならく、神護景雲二年以還、諸国国分寺をして毎年正月八日より十四日に至るまで最勝王経を読み奉らしめ、吉祥悔過を修せしむ。不祥を消除し、国家を保安せんが為なり。而るに今、講読の師かならずしも其の人にあらず。僧尼懈怠して、周旋して法に乖き、国司検校するも、亦心存せず。徒に修福の名のみ有りて、すべて殊勝の利なし。此則ち緇素処を異にし、相監察せざるの致す所なり。宜しく国分寺に行ふを停め、庁事にて之を修せしめん。自今以後、立てて恒例とせん。

神護景雲二年(768)以来,諸国の国分寺において正月八日から十四日に到るまで最勝王経が講じられることになっているが,その際,いっしょに吉祥悔過を行っていた。『金光明最勝王経』の中に「大吉祥天女品」あるいは「大吉祥天女増長財物品」がある。吉祥天女に向って悔過を行うことによって,衣食に満ち足り,寿命を延ばし,雨も降って穀物も実り,果物もたわわに実る,さまざまな不祥を除去して国家を保全することができるというわけである。薬師寺にある国宝「吉祥天女画像」など,この吉祥悔過のために使われたのであろうが,その豊かさとあでやかな美しさに,ふとルーブルで見たアフロディテ像やウフィッチのボッティチェルリへの思いがよぎる。吉祥天女はギリシアの豊穣の女神であるアフロディテ(ヴィーナス)の仏教ヴァージョンだといっていいかもしれない。ところが,吉祥悔過を行うのに適当な人がいず,僧尼たちも怠惰だし,国司たちも国分寺のことになどには意を払ってはいない。そんな状態では,名目ばかりは残って利益を得ることができない。これは役人と僧侶が別のところにいて、お互いに監視していないからである。そこで,今後は国分寺で

の吉祥悔過はやめて、役所の方で行うことにして、それを恒例にしようということになる。

『延喜式』玄蕃寮を読むと、正月八日から十四日まで、部内の諸寺の僧を呼んで国庁で吉祥悔過を修せしめるとあり、そこには細字で注釈が施されていて、国分寺の僧はもっぱら最勝王経を読むことにして、この法にはかかわらないとしている。『延喜式』の規定は承和六年に出た勅令を受けてのものであると考えられる。吉祥悔過だけを国分寺から切り離し、国府で国分寺の僧以外の僧を呼んで行う意味がどこにあるのか、腑に落ちない感じがするが、これら仏教界への朝廷の容喙は、やはり橘嘉智子の意志を反映してのものであろう。この同じ時期、橘嘉智子は日本仏教史にもう一つ大きな足跡を記している。彼女は檀林皇后と呼ばれるが、それは京都の嵯峨に檀林寺を創ったからに他ならない。

『続日本後紀』承和三年閏五月に造檀林寺使主典の秦家継の名前があって,承和三年 (836) には檀林寺はすでに着工されていたようである。嘉智子が崩御したのは嘉祥三年 (850) 五月四日のことであるが,その翌日の『文徳実録』の記事に,「后みずから泡幻を明らかにし,篤く仏理を信ず。一仁祠を建てて檀林寺と名づけ,比丘尼の律を持する者を遣りて寺家に入住せしむ。仁明天皇其の功徳を助け,五百戸の封を施捨し,以て供養に充つ」とある。嘉智子がすでに創建していた寺に,その崩御の後,供養のために五百戸を封じたというのである。『元亨釈書』巻六の浄禅三の一に義空という僧侶の伝記がある。その中に檀林皇后が登場する。

釈の義空は唐国の人なり。塩官の斉安国師に事ふ,室中推して上首となす。初め慧夢法師海を跨えて法を覚む。吾が皇太后橘氏,唐地の禅化を欽ひ金幣を夢に委して有道の尊宿を扣聘したまふ。夢,杭州の霊池院に到って国師に参じ,且太后の幣を通ず。国師感嗟して之を納る。夢曰く「我国は信根純熟して教法甚だ盛なり,然れども最上の禅宗は未だ伝ふることあらず。願はくは師が一枝の仏法を得て吾土宗門の根柢となさんも亦宜ならざらんや」と。国師,空をして其請に充てしむ。空便ち夢と共に海に泛んで大宰府に著く。夢先づ馳せ奏す。敕して空を迎へて京師東寺西院に館せしむ。皇帝の来賚甚だ渥し。太后,檀林寺を創して居せしめ,時時に道を問ひたまふ。官僚,指受を得るもの多し,中散大夫藤公兄弟は其選なり。夢,再び支那に入つて蘇州の開元寺の沙門契元に乞うて事を勒して琬琰に刻み,題して「日本国首伝禅宗記」と曰ふ,舶に附して寄せ来る。故老伝へ曰ふ「碑は羅城門の側に峙てり」と。門楹の倒る、や碑も又砕け,見に今東寺講堂東南の隅に在り。

慧夢という僧には、たまたま佐賀県唐津の鏡神社にある高麗仏画である楊柳観音像について考えていて、高麗の忠宣王がしばしば江南に出かける理由を調べている過程で衝きあたったことがある。忠宣王は本国の高麗には帰りたがらず、王位を下りてまでも元の都に留まりたがった。その間、「江浙に南遊し、宝陁山に至りて還る」という遊覧を行う。それが何を

意味するのか考えていたのだが、それは「遊覧」ではなく、実は「巡礼」だったのである。 浙江省の寧波の沖の舟山列島は観音菩薩の聖地となるが、それというのも、それこそ日本の 慧夢が列島の中の一つの島に補陀落寺を創建したからなのである。その寺のある島が補陀山 であり、廃位した忠宣王が行った「宝陁山」というのはまさしくそれであるに違いない。慧 夢は観音像を得て日本に帰ろうとしたものの、観音像を載せた船が進もうとしない。そこで、 慧夢は日本に帰ることを断念してその地に留まり補陀落寺を建てたのだという。忠宣王は観 音信仰が嵩じて日本人の慧夢が創建した補陀落寺に巡礼していたのである。

この『元亨釈書』を読むと、慧萼が中国に留まったのは二度目の中国渡航でのことになるが、最初の渡航では、慧萼は橘嘉智子に渡された金品を懐中にして、日本にはまだいない禅僧を求めに行ったのである。それは聖武天皇(光明皇后)の時代に日本にはまだいない戒律の師を求めて栄叡と普照が唐に渡ったのに比べることができる。普照が苦難の末に鑑真和尚を連れ帰ったように、慧萼は斉安国師の一番弟子の義空をわが国に連れ帰った。大宰府に到着すると、慧萼は駆けるようにして急いで都に帰って報告した。天皇(仁明だと思われる)は命じて義空を都に迎え、まずは東寺の西院に住まわせたが、橘嘉智子が檀林寺を創建して住まわせることにして、彼女は義空にしばしば禅の道を尋ねた。官僚たちの中にも教えを請う者が多く、中でも藤原良房と良相の兄弟はその中の選良であった。この藤原北家を隆盛に導いた二人が禅を嗜んでいたということは、北家の専横ばかりに目が行きがちだが、着目していい事実である。慧萼はふたたび中国に渡り、蘇州の開元寺の契元という沙門にこの事を文章にすることを頼んで玉石に刻ませた。慧萼はその「日本国に始めて禅宗を伝ふる記」という石碑を船に頼んで送り(自身は観音像とともに補陀落寺に留まったのである)、その石碑は羅生門の脇に建てられた。しかし、羅生門が倒壊するとともに、その石碑も砕けて、今は東寺の講堂の東南の隅にある。

『元亨釈書』では以上の本文に対して、 賛を付す。それが注釈の形を取ることになる。 はなはだ重要なことが書かれているので、それも引用してみよう。

賛に曰く、予碑刻を求むるに無し。乃ち東寺に如きて親ら之を摸印す。其碑破れて存するもの四片、大なるものは径二尺余、小なるものは尺に盈たず。額の左右には蟠龍偉如たり、頭角完からずと雖も鱗甲燦然たり。其文残欠して句読成らざるも、其字画の存せるもの亦甚だ鮮明なり。妙筆に非ずと雖も頗る楷正となす。予便ち四片のものを印して帰る。之を上にし之を下にし、之を左にし、之を右にし、百計剽閲して少しく明らむべし。世に言ふ、橘后密法を弘法に問ひたまふ。法、盛に之を称す。后曰はく「更に法の之に邁たるものありや。」法曰く「太唐に仏心宗あり、是れ達磨の伝へ来る所なり、熾に彼の地に行はる。空海又少しく之を聞くと雖も未だ之を究むるに暇あらざるのみ」と。茲に因つて后、蕚をして霊地に扣問せしむと。今の碑は文句成らずと雖も而も斑斑或いは見ゆ、世の伝ふる所徒然ならず。

虎関師錬はその碑文を模刻したものを探したがなかった。そこで東寺に行って自分で模刻しようとした。しかし、その石碑は砕けて残ったものは四片に過ぎなかった。大きなものは二尺ほどあったが、小さなものは一尺に満たない。額に龍が刻まれているものの、頭角は完全には残っていない。ただ鱗甲は燦然としている。文章は断片的で正確には読みとれないが、残っている文字は鮮明で、優れた筆跡ではないが、楷書できちんと書かれている。その四つの断片を模印して帰って、上にしたり、下にしたり、左にしたり、右にしたりして、あれやこれやと考えてなんとか文章の意味を汲みとることができた。世間で言い伝えている話がある。それは、檀林皇后が空海に真言密教について教えを乞うたときに、空海はさかんに真言密教の優越を称賛した。皇后はさらに尋ねた、もっと優れた仏法の教えはあるのだろうか、と。すると、空海は、中国には禅宗というものがあり、これは達磨がインドから伝来したもので、中国では隆盛している。自分はすこしは聞きかじったものの、それを深く探求する余裕がなかったと答える。そこで、禅宗を深く知りたいと考えた皇后は慧夢を中国に遣ったというのである。東寺の碑文は全文が明らかではないが断片的には理解できる。世間の伝承は嘘ではなかったと、虎関師錬は結論する。

日本の禅宗の渡来については、普通にはまず筆頭に臨済宗をもたらした栄西の事跡を挙げ る。しかし、実は義空を、あるいはむしろ義空を招いた橘嘉智子を挙げるべきなのである。 しかも、伝承には、空海までもが登場する。中国での最新とされる真言密教をもたらして自 信満々な空海に対して、もっと優れた教えはないのかと、橘嘉智子はほとんど詰問までして いるかのようである。そこで空海は仕方なく禅宗の存在をもらしたというのである。『元亨 釈書』の著者の虎関師錬(1278~1346)と夢窓疎石(1275~1351)とは同時代の人であった から、夢窓疎石もまた日本の禅宗の歴史における橘嘉智子の役割をよく理解していた。彼の 『夢中問答集』には「皇后宿習開発して、教外の宗旨を悟りましき」とあって、教わる以上 の禅の悟りの境地に到ったというのである。この記事をあだや疎かにはすべきではない。承 和の変がきっかけとなって橘氏は一気に衰退するとともに,後ろ盾もなく,禅も時代に先ん じ過ぎたのか、檀林寺は衰えて廃寺さながらになったようだが、その敷地は後嵯峨院の亀山 殿となり、さらに後には足利尊氏の手によって、政敵であった後醍醐天皇の菩提を弔うため、 あるいは憤怒を抱きながら死んだであろう怨霊を鎮めるための天龍寺となる。夢窓疎石がそ の創建の資金を得るために天龍寺船のアイデアを出し、この寺の開山となることになる。そ のときにそこが橘嘉智子の檀林寺の故地である、あるいはみずからはその檀林寺を再興する のだという意識はかならずともなったものと思われる。嘉智子は時代に先んじ過ぎて、加持 祈祷の仏教の時代に禅は根付かなかったが、今や禅の時代である。天龍寺は京都五山の筆頭 として威容を誇ることになるが、その広い天龍寺の境内のここかしこには橘嘉智子の造営し た檀林寺の名残が残っているのではないかと思われる。

もう少し橘嘉智子につきあってみたい。日本の仏教にはやはり根底に女性蔑視があると考えざるをえない。『元亨釈書』に見えるのは高僧の伝記ばかりで、高邁な精神をもつ女性た

ちについてはほんのわずかしか触れない。『今昔物語』などの仏教説話集には信心深い庶民の女性の果報が語られることはあるが、キリスト教に見える聖女たちとは質が違っている。 橘嘉智子はまちがいなく西洋なら列聖されてもいいはずの女性なのだが、その聖女性を日本の風土はみごとに屈折した語り口で伝えることになる。京都太秦の広隆寺の前に帷子の辻というところがある。その地名の語源として、たとえば『都名所図会』巻四には、

帷子辻 材木町の東にあり。上嵯峨・下嵯峨・太秦・常盤・広沢・愛宕等の別れ道なり。帷子の辻といふは檀林皇后の骸骨さが野に捨ししとき帷子の落散りし所なり。

とあり、また『擁州府志』に、

帷子辻 伝へ云ふ,檀林皇后遺勅に任せ,野葬し奉る時に,著御したまふ所の帷子斯 処に残ると云ふ。

とある。

橘嘉智子は「薄葬」を望んだことが『続日本後記』にも記されている。それがここでは嵯峨野に棄てられた,あるいは野葬されたと伝わる。しかも,遺体を運ぶときにこの場所で彼女を覆っていた帷子が落ちたといい,京都に住む者にとっては馴染みの深い地名が中世的な色調を帯びるものになる。身体を覆っていた帷子が落ちたとすれば,彼女の死体は裸形になったわけで,いわゆる「九相図」は彼女の死体が帷子の辻で腐敗していく過程を描いたものだという暗示がすでにここではなされていることになる。



写真8 京都 帷子ノ辻

中世、天台三部の中の『摩訶止観』や蘇軾の「九相詩」をもととして、生きていたあいだ は美しかった女性も、死ねばその体は青黒く変色し、内臓がまず腐敗してガスで膨張し、次 には皮膚が破れて蛆虫が湧きだし、野犬や鳥が腐肉を漁って、ついには骨だけになってしま う様子を九段階に分けて描いた「九相図」が盛んに描かれる。それは美しかったという評判 の女性、たとえば小野小町を描いたものとされるわけだが、檀林皇后橘嘉智子を描いたもの だとされるものもある®。男性にとって女性に対する欲望は煩悩の中でも最たるものであり、 それを断ちきるための「不浄観」を身につけるのを目的とした画である。女性の身体などた だの腐肉に過ぎない、だから男たちよ、すみやかに煩悩を断て、というわけである。谷崎潤 一郎の『少将滋幹の母』は若くて美しい妻を奪われた老人が夜毎に屋敷を抜け出しては京都 の郊外に歩いて行く。子どもが不審に思って、後をつけて行くと、老人は野に放られて腐敗 していく女の死体をじっと見て、みずからが執着してやまない美しい妻の肉体を忘れようと していたのである。谷崎らしく、そんなことはできるわけがないという結論になり、この小 説はあくまでも美しい女性への喝仰に終わるのだが、檀林皇后はみずからすすんで不浄観の 手立てとなるためにみずからの死体を捨てさせたというのである。単なる伝承に過ぎないが、 仏教に帰依した女性の窮極の捨身の行といえなくもない。その九段階を経て腐敗し骸骨だけ になって行くのが小野小町だとする人びとの想像力には美に対するルサンチマンを感じざる をえないが、それが檀林皇后の伝承になるとき、少しニュアンスが異なって来る。虎関師錬 や夢窓疎石のような禅の高僧が日本における禅者の嚆矢であると彼女を位置づけるとすれば、 やはり檀林皇后自身の開悟の姿を現わしていることになる。

今は小さな本堂と庫裏だけを集落の奥に残すに過ぎない和泉国国分寺を論ずるのに、伝承をたどって、現代の歴史学がそれらを除去していくのとは逆に、加算に加算を重ねて、光明皇后、県犬養橘宿祢三千代、そして橘嘉智子について述べて来た。われわれの共同研究は伝承をも貴重な遺産としてとらえ直すことも意図していると考えてのものである。和泉国国分寺の前身の安楽寺は光明皇后の誕生地に創られ、しかも皇后は実は僧侶の小便を嘗めた雌鹿が懐胎して産んだ子だったという不思議な伝承の意味を探りながら、母親の三千代の出自である県犬養(橘)氏の本拠地は和泉国にあったのではないかと考えた。それは地名をもとに

⁸⁾ 山本聡美・西山美香『九相図資料集成 死体の美術と文学』(岩田書院 2009年) その他,次の書物には全体にかかわってお世話になっている。

[『]和泉市史紀要第11集 古代和泉郡の歴史的展開』(和泉市史編纂委員会 2006年3月)『和泉市の歴史6 和泉市の考古・古代・中世』(和泉市史編纂委員会 2013年)なお、史籍の引用については、次の通りである。

[『]続日本紀』については岩波書店の新日本古典文学大系のシリーズのものを用い,丁寧に施されているルビは省略したところもある。

他の関わりのある六国史の記事については、『新訂増補 国史大系3 日本後紀・続日本後紀・文徳 実録』(吉川弘文館) を用いて原漢文を筆者が読み下した。

[『]元亨釈書』については『国訳一切経 和漢撰述部 史伝部19 20 元亨釈書上・下』(大東出版社)を使用した。

考察したものであったが、橘諸兄の墓と伝える古墳が行基ゆかりの久米田寺の背後にはあり、同じく諸兄の築いたという堰堤があり、なぜか橘逸勢とその娘の伝説まで和泉にはあって、この和泉=県犬養(橘)氏本拠地説はかなり蓋然性が高い。平安時代になってその橘氏から嵯峨天皇の后となった橘嘉智子が出るが、安楽寺が国分寺に昇格したのはこの嘉智子の時代であった。三千代―光明皇后―檀林皇后の血縁者は類まれな美貌を受け継ぐとともに、高い精神性をも受け継いだ。三千代については、法隆寺にある白鳳時代の仏教美術の逸品といっていい橘夫人念持仏を念頭にそう書くのだが、法隆寺の西円堂も彼女が創建したものであった。国分寺・国分尼寺の創建は聖武天皇の意志であるよりも光明皇后の意志であったというのは正史である『続日本紀』に書かれていることである。そして、日本最初の禅刹である檀林寺を造って禅の世界に悟入し、「九相図」の伝承を生む檀林皇后は仏者の窮極の姿を示している。有名な話だが、光明皇后自身も似通った捨身の行を行っている。今、わたくしの机の上には義空および檀林皇后について書くために開いた『元亨釈書』がそのままになっている。彼女の履歴を記すのには『続日本紀』の記事を使ったが、彼女の国分寺・国分尼寺の創建を発願する精神性について考えるために引用して、この稿を終わりたい。

東大寺の成るに及んで后以謂ひたまふらく、大像大殿皆既に備足せり、帝外に勗めたまひ、 我れ内に営む、勝功鉅徳加ふべからざるなりと。 且 く詫る 意 あり。一夕閤裏の空中に声あ つて曰く「后誇ることなかれ。妙触宣明、浴室澣濯、其の功言ふべからざるのみ」と。

后怪み喜びたまひ、乃ち温室を建てて貴賎をして浴を取らしむ。后又誓つて曰はく「我親ら千人の垢を去かん」と。君臣之を憚る。后の壮志沮むべからず、既にして九百九十九人を竟へたまふ。最後に一人あり、徧体疥癩にして臭気室に充つ。后、垢を去るに難る。又自ら思つて言さるゝよう「今千数に満つ、豈に之を避けんや」と。忍へて背を摺りたまふ。病人の言く「我れ悪病を受けて此の瘡を患ふること久し。適々良医あり教へて曰く「人をして膿を吸はしめば必ず除愈を得ん」と。而れども世上深悲の者無し、故に我が沉痼此に至れり。今后、無遮の悲済を行じたまふ、又孔だ尊し。願はくは后、意あれや」と。后已むをことを得ずして瘡を吸ひ、膿を吐きて頂より踵に至るまで皆遍し。后病人に語つて曰はく「我汝が瘡を吮ふこと慎んで人に語ること勿れ」と。時に病人大光明を放つて告げて曰く「后、阿閦仏の垢を去くこと又慎んで人に語る勿れ」と。后驚いて之を視たまふに、妙相端厳にして光耀馥郁たり。忽然として見えず。后驚喜無量、其の地に就いて伽藍を構へ、阿閦寺と号さしめたまふ。

大学の初年度、習いたてのフランス語の勉強のために辞書と首っ引きでフローベルの『もてなしの聖ジュリアン(La Légende de Saint Julien l'Hospitalier)』を読んだ。狩りに明け暮れて獣たちを殺しまくり、両親までを殺してしまって回心をし、城を棄て妻を棄てて乞食の僧となり、川の渡し守となった聖ジュリアンの話である。物語の最後、死にかけた重篤のハ

ンセン氏病患者の身体をジュリアンは裸になって暖める。その重篤の患者が実はキリストであったという,光明皇后のこの湯屋の話と似た話である。フローベルは自分の故郷のルーアンの大聖堂のステンドガラスの絵物語を小説化したのだというが,『ボヴァリー夫人』や『感情教育』を書いたフローベルが,子どものころから親しんだステンドグラスの物語をもとに芥川のような皮肉な批評や諷刺など一切加えずにコントに仕立てた,それと同じ程度の聖者への親しみと敬愛の情とをもって,われわれは光明皇后や檀林皇后を仰ぎ見てもいいのかもしれない。和泉国国分寺を調べながら,三人の女性たちに出遭うことができて,まことに幸せな時間を過ごすことができた。

(2015年3月 東大寺のお水取りが始まる日に)

(2015年3月27日受理)

Southern Osaka; The Cradle of Japanese Buddhism II Along the Makio River (1): Kokubunji

UMEYAMA Hideyuki

Today, many ancient temples or the ruins of ancient temples can still be found along the Makio River. In the small village of Kokubu, as the name suggests, there once was the grand temple of Kokubunji, which watched over the peace and prosperity of the Izumi region. The villagers of Kokubu have for a long time believed a very strange legend.

In the legend, a female deer conceived after licking a drop of urine of a hermit. The deer bore a baby who grew into a beautiful woman, who later was recommended to enter the Imperial Court. Eventually she became Empress. She built kokubunji Temple as a memorial to her mother and the place of her birth. In short, the tradition that's been passed down is that Empress Kōmyō was indeed the daughter of a deer.

This legend sounds so strange and incredible that we might be tempted to laugh it off. But there is a possibility that Empress Kōmyō was in fact born here in Izumi. Her mother, if not a deer, was of the Tachibana family, and has left her marks all around Izumi.

Behind Kumedera Temple is the large tomb of Tachibana no Moroe, one of the most important persons in the history of the Nara period. On the border of Osaka and Wakayama prefectures can be found the tomb of Tachibana no Hayanari, one of the greatest calligraphers, that was destroyed in a great rebellion.

Empress Danrin, also called Tachibana no Kachiko, was an ardent advocate of Buddhism and the first to import Zen into Japan. It was also she who renovated Kokubunji Temple during the Heian period. By researching the connections of the Tachibana family to the Izumi region, we hope to clarify the meaning of a legend that, on its surface, seems too unbelivable to be true.